

『夕焼け』の授業における「自我」の欠落

——文化的同調の要求——

池田 久美子

〔資料〕

夕焼け⁽¹⁾

吉野 弘

いつものことだが

電車は満員だった。

そして

いつものことだが

若者と娘が腰をおろし

としよりが立っていた。

うつむいていた娘が立って

としよりに席をゆずった。

そそくさととしよりが座った。

礼も言わずにとしよりは次の駅で降りた。

娘は座った。

別のとしよりが娘の前に

横あいから押されてきた。

娘はうつむいた。

しかし

又立って

席を

そのとしよりにゆずった。

としよりは次の駅で礼を言つて降りた。

娘は座った。

二度あることは と言う通り

別のとしよりが娘の前に

押し出された。

可哀想に

娘はうつむいて

そして今度は席を立たなかつた。

次の駅も

次の駅も

下唇をキュツと噛んで

身体をこわばらせて――。

僕は電車を降りた。

固くなつてうつむいて

娘はどこまで行つたらう。

やさしい心の持ち主は

いつでもどこでも

われにもあらず受難者となる。

何故って

やさしい心の持ち主は

他人のつらさを自分のつらさのように

感じるから。

やさしい心に責められながら

娘はどこまでゆけるだろう。

下唇を噛んで

つらい気持ちで

美しい夕焼けも見ないで。

本論の見通し

右の詩を読んで、生徒は例えば次のように考える。(2)

① 席をかわらなかつたくらいで、「下唇をキユツと噛んで、身体をこわばらせて」いるというのが理解できない。

② そんなに苦しむくらいならなぜ席をゆずらなかつたんだろう。

③ 三人目のとしよりが押し出されたときに「可哀想に」とあるけれど、その意味がよくわからない。

これらの疑問や批判を授業ではどのように扱っているだろうか。

一般に、このような疑問や批判が出てくるのは、生徒がこの詩を十分に読めていないからだとみなされている。特に、「娘」の心情を充分共感的に理解できていないからにはかならないというのである。「娘」の心情を共感的に理解することができれば、当然、このような疑問や批判が出てくるはずがない。したがって、このような疑問や批判をもっている生徒に対しては、「娘」の心情を共感的に理解させることが必要である。これが、授業での一般的な扱い方である。

しかしそうだろうか。右の疑問や批判は、読みが不充分であるがゆえに出てきたものにすぎないとみなすべきなのか。

本論では、このみかたを批判し、次のことを主張する。

1、生徒がこれらの疑問や批判をもつのは極めて当然のことである。むしろ、大いにもつべきである。「夕焼け」が表現しているのは、未成熟で、自律的な自我を確立できていない人物像と、その人物に対する感傷的な思い入れではないからである。これらの疑問や批判を讀みの不足とみなし排するのは誤りである。

2、「夕焼け」に対して共感を強い、これらの疑問や批判を封ずることは、自我の働きを無視し、自我の確立が教育の第一義的な目標だとはみなしていないことを示している。「自我」という観念が欠落しているという点で、「夕焼け」の授業の内容と方法とはまさに一体である。

3、「夕焼け」の授業で行っていることは、実のところ、特有の文化に対する無批判な同調の要求⁽³⁾でしかない。その文化自体をつき放して分析・批判する自我の働きは、全く封じられているのである。

一、「娘」の行動と認識

「夕焼け」の叙述によれば、「娘」の前に三度も次々ととしよりが立ち、「娘」が席をゆずらざるをえない状況が生じたという。「娘」はこのとき、「うつむいて」「下唇をキュッと噛んで／身体をこわばらせて」「席を立たなかった」。これと同様の状況において他にどのような行動のしかたがあるであろうか。「娘」の行動と認識のあり方を分析するにあたって、次に対照的な例を挙げてみよう。この例と対比することにより、「娘」の行動と認識の特質とその限界が明確になるからである。

——「娘A」の場合——

「娘A」は、三度目にまたもやしよりが目の前に出てきたのでびっくりし、オヤオヤという顔をする。／参ったな。よくよくきょうはとしよりに好かれるのかな」と、三度も席をゆずらざるをえない状況に陥った自分に困惑もし、またおかしく滑稽にも感ずる。微苦笑を禁じえない。

しかし、さてどうしたものだろうか。

「娘A」は祖父母の同居する家庭に育ってきた。だから、祖父母の足腰がいかに弱ってきたかがよくわかる。先日、祖母が転んで膝を打ち、通院している。立ち上がるときが特に辛そうである。手を貸してやると、実にありがたいという顔をする。また祖父も、小さい弟を連れて散歩に行つて、弟にせかされては「そう早く歩くと疲れる」と文句を言っている。こうした日常生活において、「娘A」はとしよりの身体が若い自分と違つて弱く脆いものだという学習を蓄積してきている。

だから、「娘A」は、揺れる電車の中でじつと立っていることがとしよりにとつてどのようなことなのかを想像できる。三度も席をゆずるはめになった自分を一方ではおかしく思いながら、やはり今度も「娘A」は席を立つのである。

以上の例と対比して「娘」の行動と認識を分析してみよう。

(一) 三度も次から次へととしよりに席をゆずらねばならない状況は、現実にはめつたにあることではない。シルバースhirtにでも腰かけているか、老人の団体とでも乗り合わせるかでなければ、まず起こりえないことである。

それなのに、『夕焼け』の叙述には、「娘」が事の異常さにびつくりしたり、あつげにとられたりした様子は全く書かれていない。三度目に至つても、「娘」は前と同様、相変らず「うつむいて」いるだけである。

一体「娘」は事の異常さにびつくりはしなかつたのか。一度ならともかく、三度もいれかわりたちかわりとしよりが目の前に出てくるのである。この異常さにまずびつくりするのが、人間の自然な心の動き、反応というものではないか。それとも、「娘」は事の異常さにびつくりする心の余裕もなく、としよりが目の前に出てくると反射的に、席をゆずらねばならないということだけで頭が一杯になってしまうのであろうか。

オヤオヤという顔をした「娘A」と比べて、「娘」の反応は不自然であり、余裕のなさが目立つ。他人の目に対する過剰な意識と、席をゆずらねばならないという強迫観念によって、事の異常さにびっくりしてみせるという自然な心の動きの表現すらが封殺されているとしか解釈しえないのである。

(二) 生徒はいう。「席をかわらなかつたくらいで、『下唇をキュッと噛んで、身体をこわばらせて』いるというのが理解できない。」

誠にその通りである。一体、「娘」においては事の大小の区別はどうなっているのであろうか。席をゆずりそこねた程度でかくも苦しむのであれば、人生におけるもっと深刻な問題に直面したときには、「娘」は一体どのような反応をするつもりなのであろうか。心配である。茫然自失したり、なすすべもなくなったりするのが関の山で、自力で事態を打開することなどできないのではなからうか。「娘」には、事の大小の区別をして自分の感情を制御し自分の言動体系を持していくバランス感覚が育っているとは到底いえない。バランス感覚をもちあわせていれば、席をかわらなかつたことは後悔するとしても、過剰な自責の念から自分を守り自分を失わない理性が働くはずである。次の機会には思い切つて席をゆずらなければダメだなと反省でもすればすむことだからである。

(三) 三度も席をゆずらざるをえない状況に陥つたとき、この状況をどうみるかで、二人の娘は大変異なっている。「娘A」は、困惑しながらも、一方ではその状況をおかしく思い、自分を滑稽視する心の余裕がある。これに対して、「娘」の方はすっかり状況にのまれてしまっている。

自分と自分がおかれた状況とをつき放し距離をおいて見ることができるといふか否かは、どれ程その人物が成熟しているかにかかっている。つまり、どれ程「見る自分」を確立しているか、どのような状況にあつてもいかにその「見る自分」を失わず持っているかによるのである。

人は、状況にのまれず一貫した「見る自分」を確立させてこそ、初めて「見られる自分」の言動を統御することができる。「娘」が三度目に至ってついに何事をもなしえず支離滅裂な行動に終わったのは、この「見る自分」が確立していないことのあらわれである。

三度にわたって席をゆずらざるをえない状況に陥ったからといって、別に他人と比較して、なぜ自分だけが席をゆずらなければならないのだろう、などと辛く感ずる必要はない。ましてや、誰も代わって席を立ち助けてくれようとはしない、などと恨めしく思うこともない。この程度のことでは細かく損得を考え不公平感をつのらせ、他人のあたたかい思いやりや助けがなければやっていけないとしたら、誠にひ弱な人物である。むしろ自分をつき放し、自分や状況におかしさをさえ見出すことで、少々のこと動じない強さを身につけるべきである。その点で、「娘」の反応のしかたは誠に情ない。

四) としよりに席をゆずるといふ道德観念のあり方も、「娘」と「娘A」とでは大変異なっているようである。

「娘A」の場合は、充分なとしよりについで学習経験の蓄積がある。この経験の蓄積に支えられて、としよりに席をゆずるといふ道德は「娘A」の行動を方向づける機能を果たしている。

これに対して「娘」の場合はどうか。「娘」はどれほどとしよりについで学習経験を積んできたのか。「夕焼け」の叙述には何も書かれていない。全く不明である。しかし、(一)で指摘したように、「娘」はびっくりしてみせるだけの心の余裕すらなく「うつむいて」いる。席をゆずらねばならないということが殆ど強迫観念として「娘」を縛りつけ、自然な心の動きの発露さえも妨げているようなのである。「娘」においては、席をゆずるといふ道德は、その行動を方向づけるだけのとしよりについで学習経験の支えをもたぬものではあるまいか。「超自我の道德は、自己嫌悪・忍従的遵守・感情の抑えつけ・意識の稀薄化等々の重大な心理的な代価をうばうことがある」⁽⁴⁾という。

「娘」にとって席をゆずるといふ道徳は、まさにこの超自我的道徳でしかないのではなからうか。

以上のように見てくると、「娘」は「娘A」に比べてひ弱で未熟な人物としてみられてもしかたがないであろう。特に、その自我の脆さが際立つ。事の大小の区別をつけ、過剰な自責を排し、常に客観的な言動においてその一貫性を保つていくという自我の働きの、およそみられないのである。

人は、各々の直面する問題が自分の生き方の原則に深く関われば関わる程、その苦しみも増すのである。生き方の根幹に抵触するようなことを為した場合にこそ、最も深刻な自責の苦しみを負うのである。何が生き方の原則であり根幹であるかは、各人が決めることである。そして、それによって各人の言動体系のあり方が確立するのである。

「娘」には、こうした自分の生き方の原則を確立し、一貫した言動体系を持ていこうとする志向性が乏しいようである。例えば、としよりに席をゆずるといふことは三度目で放棄し、一貫して何度でもゆずるといふことがない。中途半端である。もし三度もゆずる必要がないのなら、「下唇をキュッと噛んで／身体をこわばらせ」たりしなくてよい。「娘」にあるのは、他人の目に対する過剰な意識と、席をゆずらねば悪いという強迫観念、そして、席をゆずれなかった自分への過剰な自責だけである。「娘」には、自我が確立できていない。

二、「僕」のみかたの限界と問題

「娘」はひ弱で未成熟である。これが一節での結論であった。ところが、「僕」は「娘」についてこれとおよそ対照的なみかたをしている。「僕」に言わせれば、①「娘」は「可哀想」なのである。②「娘」は「他人のつらさを自分のつらさのように感じ」ているのであり、③「やさしい心の持ち主」なのである。そして、②③ゆえに、④「娘」

は「受難者」となるのである。この「僕」のみかたを批判する。

——①について——

「僕」は「娘」のことを「可哀想に」という。この「可哀想に」は、「娘」の陥った状況を酷だとみなし、同情しいたわる表現である。「娘」に対する憐憫の情の表現である。

しかし、一節ですでに述べたように、たかが三度にわたって「娘」のところにはばかり集中的にとしよりが立ったというだけのことである。もちろんいささか困りはするであろう。しかし甚だしい人権侵害を被ったという事態とはわけが違う。むしろ、若い元気な者が満員電車の中ですわろうなどと考えること自体が軟弱だと、逆に叱責されても仕方のないことである。一体どこが酷であろうか。この程度のことでは「可哀想」だと同情するのであれば、もっと深刻な事態に陥った場合には何というつもりなのであろうか。

『夕焼け』の叙述の中にはどこにも、別に「娘」が足の不自由な人だとか、病気であるなどは書いていない。「娘」は特殊な事情を背負っているわけでもない、五体満足な若者だとみなしてよいであろう。しかも、「娘」というのだから充分自分の意志と判断で事態を打開していく力を持つているはずの年齢である。保護を必要とする小さい子どもではないのである。このような人物に対して「可哀想に」というのは、過保護というものである。むしろ、自立した人間であるべき「娘」に対する侮辱ではないか。

「僕」は、「娘」が自分の意志をもち、自分の陥った状況を自力で打開していくことのできる独立した人格の持主だということ的前提にはしていない。むしろ、そのように自立していない、か弱く無力な保護を必要とする人間だということを前提し肯定しているのである。だからこそ「可哀想に」といえるのである。憐憫の情を寄せたくないので

ある。「娘」を自立した人間であるはずだという前提でみれば、「可哀想に」などというわけがない。むしろ、「娘」の対応のしかたを自立した人間にはふさわしからぬふがいなものと思うはずである。そして、「可哀想に」ではなく、「情けないことに」というであろう。「情けないことに」といわずに「可哀想に」としかいえなかつたところに、「僕」が「娘」を基本的にどうみているかという前提が端的にあらわれているのである。

②③について

「僕」は「娘」が「他人のつらさを自分のつらさのように感じる」がゆえに、その「やさしい心に責められ」ているのだという。「やさしい心」にせよ、「他人のつらさを自分のつらさのように感じる」にせよ、これらはみな、「娘」に対するほめ言葉である。「僕」は「娘」の心の内に善さを見てほめているのである。

しかし、このみかたもまた、かえって「娘」に対する侮辱ではないのか。

「娘」は客観的には三人目のとしよりには席をゆずらなかつたのである。「娘」に「やさしい心」があるというのなら、この客観的な行動の事実はどうなるのか。この客観的な行動を「僕」は全く問題にせずに「娘」を評価している。「僕」が問題にするのは、客観的な行動ではなく、「娘」の心の中である。「娘」の心の中にある善さをとりたてることによって、逆に、その客観的な行動を不問に付してしまつたのである。

客観的に何を為したかを問うことなく、そのときの心のもち方についてのみ同情されいたられるということはあるいは「娘」にとつては一時的な慰めになるかもしれない。しかしこのことは、客観的な行動について責任をひきうけ、自らの行動と認識を正していく主体として「娘」を尊重することには決してならないのである。

自分の言動についてその責任をひき受け、心の内のさまざまに對立しあう種々の思いを整理し、客観的な言動にお

いてそのあり方を正していくところに、自我の働きがある。つまり、認識と行動とを統一的に統御していくところに、自我の働きがあるのである。行動については席を立ったり立たなかつたりで支離滅裂であるものの、心の中には「やさしさ」があるなどとほめることは、認識と行動とを統一する自我の働きを、「僕」が「娘」に認めようとはしていないことを示している。

しかも、人は、内的な理由いかんによらず客観的な行動について自ら責任を負わねばならない。内的な理由をもち出して言い訳することで客観的な行動を不問に付すということが通るならば、その個人の負うべき責任はなしくずしになる。

例を挙げる。

駅裏の独り暮らしの老人宅では、その周囲や庭先にまで自転車を置く者が後を絶たない。取り除いても取り除いても際限ない自転車の洪水に、老人は押しつぶされかかっている。せめて玄関先には置かないでくれといくら懇願してもだめである。「娘B」も時々つい他人のまねをして自転車を置いていつてしまう。皆がそうしているし、遅刻しなくてもある上に、なかなか置き場所が見当らない。公営の自転車置場はあるにはあるが、遠回りになるので行く気にならない。しかし、一方では気がとがめもする。古い小さい家のまわりの自転車の洪水と、時おり悲し気な顔を窺からみせる老人をみると、いつも顔をこわばらせてそそくさとその場を立ち去ってしまう。

この場合、いかに「娘B」が心を痛め、老人のつらさを自分のつらさのように感じるといっても、それで老人に対する無神経な行為を相殺することができるわけがない。むしろ、この行動を不問に付して「娘B」の心の善さをとりたててほめるとすれば、誠に不道徳である。自転車置場の件は、老人に対する不特定多数の者による人権侵害である。「娘B」も、いかに心を痛め自責する「やさしさ」があろうとも、その責任の一端を負わねばならない。この問題を

抜きにして「娘B」の心のあり方を論ずることはできないのである。

同様に、「僕」が「娘」の行動を切り離してその心の善さをほめるのも、不道德なことである。しかも、これでは評価を誤ることになる。いかに「他人のつらさを自分のつらさのように感じ」ているとしても、「娘」は客観的にはとしよりに席をゆずらなかつたのである。他人のつらさに対する思いやりが行動と結びつかず、ただ他人のつらさを感じていさえすればよいというのなら、それは感傷というものである。他人のつらさに対して実際に自分に何ができるかを考えもしない思いやりは、単なる感傷である。そのようなものをとりたててほめること自体が誠に不道德なことだと、「僕」は気づかないのであろうか。

「僕」には次の批判がでてくるのを封ずることはできない。

「娘はやさしくもなく、他人のつらさもわかっていない。その証拠に、三人目のとしよりに対する行動の事実がある。この事実があるにもかかわらずそれでもなお娘がやさしく他人のつらさがわかっていると主張できるだけの根拠が、他にあるのか。」

むしろ、客観的行動に照らして「僕」の主張の方が疑わしいものになるのである。

③ について――

「娘」は三人目のとしよりにはついに席をゆずらず「下唇をキュッと噛んで／身体をこわばらせて」いるだけであった。これが、「娘」のとつた客観的な行動である。この行動に照らして、「娘」を「やさしい心の持ち主」とする「僕」のみかたを見直すべきである。

もちろん、「娘」にはとしよりのつらさを思いやる気持があったのかもしれない。多少ともその気持があったがゆ

えに、「娘」は二度も席をゆずり、三度目には自責の念にかられているのかもしれない。この程度の思いやりの心を「やさしい心」と呼ぶ用語法があることは、認めてもよい。

しかし、その「やさしさ」とは、自分の都合のよいときには発揮できるが、苦境に陥ったときにはたちまち萎えしぼみ、客観的な行動をひき出す力のないものにすぎない。そして、場合によっては「やさしさ」とは逆の酷なことを他人に行ない、「やさしさ」ゆえにそのことに心が傷ついたりするのである。

もはや、このような意味での「やさしさ」は、この語が本来もっている正ただの評価語としての機能を喪失してしまっている。それは、むしろ負マイナスの評価語に変質してしまっている。それは、限りなく「ひ弱」「軟弱」「優柔不断」などという語に近いものである。

それならば、端的に「ひ弱」「軟弱」といえばよい。当を得た的確な語で語ることにより、現実の客観的な行動を偽らず直視すればよいのである。

「娘」の「としより」を思う気持は、「やさしさ」と呼ばず「感傷」と呼ぶべきである。そして、「娘」は「やさしい」のではなく、「ひ弱」であり「軟弱」なのである。「僕」は、「ひ弱」「軟弱」を「やさしさ」ととりちがえているのである。

④ について

「僕」は「娘」を「受難者」だという。「娘」は「他人のつらさを自分のつらさのように感じる」感受性を持っており、それゆえにとしよりを立たせたままにしてしまったことで自責の苦しみを負わねばならない。このことをもって、「僕」は「娘」のことを「受難者」だというのである。

しかし、一節で指摘したように、「娘」にはおよそ事の大小の区別がつかず、自分の言動体系を確立できていないという未熟さがある。事の大小の区別をすることで自分の感情を統御し、過剰な自責の念から自分を守るだけの強い自我が無い。そのために「娘」は過剰な自責の苦しみを負ってしまったにすぎない。自分の感情の統御機能の未熟さゆえに苦しんでいる者を指して「受難者」と呼ぶのは、異常な用語法である。

しかも、としよりに席をゆずらなかつたことについての自責の苦しみ程度のことを「受難」ということ自体が、「娘」と同様、事の大小の区別のつかないみかたである。たとえば冤罪で人生を台無しにしてしまった人のことを「受難者」だということはできるであろう。また祖国の戦乱ゆえに流浪の民となつて苦しむ人のことを「受難者」と呼ぶこともあるであろう。「受難者」とは、何らかの大義ゆえに受けなくてよい難を受ける者のことである。としよりに席をゆずらなかつたことについての自責の苦しみに、一体どのような大義が関係しているのだろうか。「僕」のみかたは全くの誇張であり、過剰な思い入れというものである。

さらに、としよりを立たせたままにしてしまったのは「娘」自身である。それに良心の呵責を感ずるとしても、やむをえないことであろう。それを「難」というのでは、個人が持つべき責任倫理を否定することになるのではないか。人は自分の為した客観的な行動について、それがひきおこす結果をひきうけるべきである。そして、それに伴う苦しみもひきうけるべきである。その苦しみを「難」などというのでは、自分の行動がその苦しみの原因だということを忘れて、被害者意識を生じさせるだけであろう。これは、転倒したみかたにほかならない。

以上の理由で、「僕」が「娘」を「受難者」というのは不適切である。

以上でとりあげた「僕」の「娘」に対するみかたは、同情と共感が含まれている点で共通している。「僕」は「娘」

に「やさしさ」「美しさ」があるとみなし、「娘」の自責の苦しみがそれゆえのものだとして、強い共感と同情を寄せられているのである。

「僕」は「娘」を、自分の意志を持ち自分の判断で事態を打開する力を持った自律的な自我の持主だとみようとほしていない。「僕」が「娘」にひかれているのは、「娘」が自律的な自我の持主だからではなく、保護を必要とするような弱くて脆い「やさしさ」の持主だからである。それは、「僕」の願望でもある。保護を必要とするような弱くて脆い「やさしい」存在であって欲しいという願望である。

しかも、「僕」自身が現代社会において、その「やさしさ」ゆえに傷ついたり苦しんだりしていると感じているのではあるまいか。そのことによって、「僕」は「娘」の姿に自分と同質のものがあると感じ、過剰なまでの共感を寄せるのではあるまいか。むしろ、「僕」は「娘」の姿に自分を投影しているのであり、そのために「娘」をつき放してみることができないのではないか。

しかし、その「やさしさ」ゆえに傷ついたり苦しんだりしているのだという思いは、実は自我の脆弱さのあらわれであろう。このことについては、すでに一節及び本節で論じた。もし「娘」が「娘A」のような対応をしていたとしたら、「僕」はこれ程感傷的な思い入れをすることはできなかったはずである。むしろ白けた思いになったのではなからうか。

こうして「僕」という人物の性格が明確になってくる。「僕」自身、かなり未成熟な大人子供であるようである。「僕」のもののみかたは、自立への志向性がおよそみられない。未成熟な男が、未成熟な「娘」に同質の甘えを見出し、行動を伴わない感傷に浸っているにすぎない。

表現上の特色が、この見方を支持し補強する。

「何故って」という幼児性すら感じさせる口語表現はどうか。また、「下唇をキュッと噛んで／身体をこわばらせて」。という思わせぶりの余情表現はどうか。堂々と最後の述語まで自分の責任においていきまるといふ構えが無い。これらはおよそ、成熟した中年の男からは到底出てこない表現である。未成熟な男がその幼児性をやさしさだと勘違いしているがゆえに出てくる表現である。そこには、読者に対する甘えと媚びすら感じられるのである。

こうして『夕焼け』の詩は、「僕」の語る内容とその表現のしかたとが一体となつて、未成熟なひ弱な人物像を作りあげることには、少くとも成功しているのである。

三、授業における「自我」の欠落

西郷竹彦氏は次のようにいう。

「『夕焼け』は）中学生の共感を得ることのできる、おもしろい詩です。……子どもたちと一緒にやっていけば、いかにみごとにできているかを思い知るだけでなく、あらためて深い感動をおぼえることになるでしょう。」⁽⁵⁾

また、指導書では次のようにいう。

「この作品そのものへの共感の上に重ねて、そこに含まれている右の様な話題性（『やさしい心』のあり方）を各自の日常生活に立ち帰つて考えてみることによって、この年ごろの読み手の心の中に、ようやく芽生えつつある、自分の生き方、人間の生き方を見つめる目の深まりを促進させる効果がある。」⁽⁶⁾

これらの論はいずれも、『夕焼け』の詩に対して生徒が共感することが当然だとみなし、それを読解指導の不可欠の目標としているものである。これらの論ばかりではなく、一般にどの授業も「娘」と「僕」の心情、もののみかたに生徒を共感させることをめざすという点で共通している⁽⁷⁾。この詩が読めるといふことは、「娘」と「僕」の心情、

ものみかたに対して読者が共感することだという、根強い考え方があるのである。いいかえれば、この詩が読めているか否かは、読者が「娘」と「僕」にどれ程共感しているかによって測られるというのである。

したがって、授業では、いかに生徒に共感させるかが問題となる。冒頭の「本論の見通し」で挙げたような生徒の疑問や批判は、共感できていないという理由で排除されてしまう。

例えば、①「席をかわらなかつたくらいで」下唇をキュッと噛んで、身体をこわばらせているというのが理解できない」という生徒がいる。これは、すでに一節で述べた通り、誠にこの通りであり、理解できないと思う方が当然である。ところが、これに対しては、「娘」が「下唇をキュッと噛んで……」という状態になったのは周囲との違和感に傷ついたからだとか、そもそも「娘」が「やさしい心の持ち主」であるために傷つきやすいからだなどと教えることで対処しようとしているのが実態である。「娘」にとっては「席をかわらなかつたくらいで」というわけにはいかなかったのであり、その「やさしい心」に共感できなければいけない、というわけである。

また、②「そんなに苦しむくらいならなぜ席をゆずらなかつたんだろう」という生徒がいる。これに対しては、「娘」は周囲との違和感に傷つき、立てなくなつてしまつたのであつて、立たなかつたのではないと教える。そして、行動することができなくなつてしまつた「娘」の苦衷に同情と共感をもたせることで、生徒に納得させようとする。しかし、これらの方法で右の生徒の疑問や批判が解消するであろうか。

①についてはどうか。周囲との違和感に傷ついたから「下唇をキュッと噛んで……」いたのだということは仮に認めるとしよう。しかし、そうだとしても、席をかわるか否かということぐらいで周囲の目を気にし、違和感に傷つくようなひ弱さはどうなのか。これに対する批判は依然として残るのである。

②についても同様である。意志的に席を立たなかつたのではなく、周囲の目ゆえに立てなくなつてしまつたという

のでは、ますます、自分の意志で行動することのできないひ弱さへの批判は強まるだけである。

こうしていずれも疑問や批判を解消することはできない。右のような説明では、「娘」のひ弱さ・優柔不断・事の大小のバランス感覚のなさに対する疑問や批判は残るのである。

したがって、授業では、これらの疑問や批判は「娘」の心情が理解できていないという読みの不足のあらわれにすぎないということにして切り捨てることになる。残る方法は、「娘」に共感するよう生徒に強いることである。「娘」の気持になってみることを促し、それ以外の観点でつき放して「娘」をみることではこの詩はわからないとしてそれを禁ずることである。「娘」の気持になってみることだけが、この詩を読む唯一正しい方法だと、不当に狭く限定してしまうのである。

しかし、『夕焼け』のような詩が良い詩だと喜ばれ共感を呼ぶ文化状況とは、どのような特質をもっているのだろうか。それは、たとえば「娘A」のような行動と認識に対しては違和感を感じ白けた思いになるような文化状況ではないのか。

「娘A」は基本的なものに動じない。困った状況に陥ったからといってそれに負けることもない。むしろ困った状況に陥った自分をつき放し、おかしささえ見出して微笑する余裕がある。ましてや、「自分ばかり立つのはひどい」などとつまらぬ損得計算をして不公平感をつのらせたり、他人と違うことをするのはいたたまれないなどと考えない。満員電車の中で立っているのは大変だろうと思いつぐ行動するだけである。

何事もなしえず、ただひたすら身を固くしてうつむいてしまう「娘」のひ弱さとは、対照的である。その行動と認識のあり方は、感傷や他人に対する依存的傾向、甘えから遠く隔っている。感傷や甘えが共感を呼ぶ文化とは相容れない。そのような文化を前提にしてみれば、「娘A」の行動と認識は、およそ可愛気のないものであり、異質性を強

く感じさせるものであるはずである。

「娘」の気持になつてみることでだけがこの詩を読む唯一正しい方法だとして生徒に共感を強いる授業では、生徒は一体何を学ぶことになるのか。

「娘」の行動を「僕」のみかたとは別に、つき放して自分なりの方法でみるのが、授業では何故か禁じられているということを知る。「娘」と「僕」に無批判に同調しなければ授業では通らないということを知る。したがって、自分の疑問や批判は自分で黙殺して、教師の意図に合わせればよいのだということを知る。いかに「娘」や「僕」の行動・認識に疑問をもとうとも、その疑問を大切にわたため、誠実に追究しようとして詩を読み直したり考えたりする学習の方法は、学びえない。何となく「娘」や「僕」に共感をもち、わかつた気になればよいのである。

さらに、ひ弱で未成熟な者に対して感傷的な思い入れをしいたわりを示すことが、大人のみかただとされていることを学ぶ。特に、行動そのものを客観的に問題にし、そのレベルで責任をもつことではなく、心の内に「やさしい心」があるということをもつて同情され、いたわられ、美化されさえするということを学ぶ。

一節、二節で指摘したように、「娘」の行動にも、「娘」をみる「僕」のみかたにも、およそ自律的な自我の働きがみられない。状況に依存し、行動に結びつかない感傷に浸るだけで全く動きのとれない脆弱な自我しかみられない。生徒が学ぶのは、こうした脆弱な自我しかもちあわせていない者のひ弱さと、それを愛すべきもののようにとらえるみかたである。

授業では、こうして、読者である生徒による批判の自由は保証されもしない。種々の異なった観点に立つ多様な読み方が出てくるよう奨励されもしない。特定の、生徒に同調させたい文化からみて異質である読み方は、一切排除される。このために、読みの指導は単なる「僕」のみかたのなぞり返しに終始する。一節、二節で示したような読み方

は、一般にどの授業でも行なわれず、考えられもしない。例えば「娘A」のような行動と認識もあるのだとすら気づかない。もちろん、これと対比して「娘」のことを批判するなど論外なのである。

しかし、異質な読み方とつきあわせるからこそ初めて、教師が意図する読み方の限界がみえてくるのである。そしてまた、無自覚に前提していた文化的背景がそうするからこそあらわになるのである。ところが、異質な読み方を一切排除してしまうために、意図する読み方の限界も文化的背景も少しもみえてはこない。無自覚に前提しているその特定の文化の同一性を維持するために、異質な読み方を排する排除原則が働くだけである。こうしてその文化は硬直し閉塞する。

結局のところ、授業の内容の中には、自律的な自我の働きの有無を分析・批判するということは全く入っていない。「自我」は問題としてとり上げられもしない。「自我」の観点は全く欠落したままである。

一方、授業の方法もまた同様である。生徒の自律的な自我の働きを無視する方法しかとられていない。むしろその働きを封ずるものとなっているといつてよい。つまり、生徒が「僕」とは違う独自のみかたをしたり、それと対比して「僕」のみかたの限界と問題点を抽出するというような活動は、全く尊重されていないのである。

冒頭の「本論の見通し」で列挙した三つの生徒の発言は、まだまとまった批判的見解とはなっていない。それらはいわば批判の芽である。断片的なある特定の部分についての、批判を含んだ疑問にすぎない。しかし、それらはいずれもうまく育て上げれば、「僕」のみかたに拮抗するばかりでなく、「僕」のみかたの限界と問題を明らかにしようとする、統一的なみかたをなすはずのものである。そこには、「僕」のみかたのなぞり返しなどではない、生徒独自の発想があるからである。

生徒はこの発想を、特定の断片的部分についてだけでなく、『夕焼け』の作品全体についての統一的なみかたにま

で育て上げるべきである。つまり、その発想でいけば、「夕焼け」という作品全体がどう解釈し直されることになるかを構想しなければならぬのである。例えば次のようにである。

たかが席をかわらなかつたくらいのもので、「下唇をキュッと噛んで……」というのは、どうも理解に苦しむ。後悔のしかたが過度に深刻である。この発想で作品全体を見直してみよう。「僕」のみかたはどうか。「僕」は少しも「娘」の態度が事の小ささに対してバランスを欠いているとは考えていないようである。それどころか、「僕」のみかた自体が、バランスを欠いてはいないか。例えば「受難者」などと誇張し、事を過度に深刻にみなしている。「娘」も「僕」もバランスを欠いている。すると、この詩は、矮小なことを誇張している点、説得力に乏しい詩だということにならないか。「受難者」だの「他人のつらさを自分のつらさのように……」だのいうには、選択された「娘」の事例が矮小なのである。だから「僕」のみかたが前半と調和せず浮き上る。読み手はつまらぬ事例でたいそうな説教でもきかされているように感じ、白けてしまう。この点で、この詩は失敗している。

このようにして、自分の発想を統一的な、かつ全体的なみかたにまで育て上げるのは、自我の働きにほかならない。強い自我の働きがなければ、すでにあるみかたに抗するだけのひとつのまとまったみかたを構想することはできない。この生徒の自我の働きを尊重し鍛えることこそが、必要なのである。

これは、単に生活指導や道徳等の特定の一部分の教育活動の目標であるのではなく、一般的な目標であるべきである。種々の教育活動が全体として対象にしているのは、一個の人間なのであって、個々のバラバラな教科に対応する諸部分ではないからである。もちろん、自我を育て鍛えるということは、詩を扱う文学教育においても考慮すべき上位目標であるのである。

文学教育が単に、文学作品にみられるもののみかた、考え方への無条件・無批判の共感的理解のみをめざすべきだと

いうのでは、この自我の問題はどこでどう考慮されるのであろうか。それとも、文学教育については別なのであろうか。そうだとしたら、なぜ、別なのか。なぜ、文学教育では自我の問題とは関わりなくてよいのか。答えるべきである。生徒の発想を統一的・全体的なみかたにまで育て上げるためには、先に示したような指導方法ではだめである。単に、「僕」の共感的なみかたと相容れず不整合であるという理由で生徒の考えを退けるべきではない。単に特定のみかたと部分的に不整合だという理由で退けたりすれば、その批判の芽は育たない。必要なのは、部分的に出てきた生徒の発想をもってすれば、作品の他の部分の解釈がそれぞれどう変ってくるかを考えさせることである。そして、作品全体がどう解釈されることになるかという、統一的なみかたを構想するよう指導するのである。こうして、すでにある解釈と拮抗しうるだけの全体的なまとまりをなすみかたを育て上げるべきである。

授業では一般に、このようなまとまりをなす統一的なみかたを構想させるための時間配分も指導方法も無い。共感を強い、特定の解釈のみに限定してしまうだけで、統一的なみかたを構想する自我の働きについてそれを鍛えようとはしていない。むしろそれを禁じ、特定の解釈に対する従順なみかたを求めているのである。

自我の働きを問題にしないという点で、「夕焼け」の授業の内容と方法とは一体である。そこには、全く、「自我」の観念が欠落している。そのかわりにあるのは、感傷と無条件の一体感であり、それをよしとする文化への同調の要求である。その点で、「夕焼け」の授業はまさに典型なのである。

註

- (1) 「国語二」(昭和五十八年二月刊、光村図書出版株式会社、一二八―一二三頁)より引用した。中学校二年生用の教材である。

ただし、ふりがなは削除した。

(2) ①③のいずれも次より引用した。北林正「子どもの疑問を深める」(一九八二年一月、『国語教育』、六九―七一頁)。

(3) 「文化的同調 (conformity) への要求」という用語は次の文献よりの引用である。P・ノネ、P・セルズニック(六本佳平訳)「法と社会の変動理論」(一九八一年十月、岩波書店、六五頁)。ただし、著者たちはこの用語を「共通の道徳律に従うこと」(前出)への要求であると定義し、法道徳主義 (legal moralism) の一つのあらわれとしてみなしている。本論ではこれに對して、より広い意味でこの用語を用いることにする。つまり、道徳律に限定するのではなく、それを含む文化一般に對する同調の要求としてとらえ直したい。

なお、この「文化的同調への要求」についての論を含む右の文献は、学校の文化状況とその力動的な構造を分析する上で示唆に富むものであることを付記しておく。

(4) 同右、六九頁。

(5) 西郷竹彦「詩の授業——理論と方法」(一九八二年五月、明治図書、一九二頁及び二〇一頁)。西郷氏はここで、この「夕焼け」について高い評価をし、具体的に「作品分析」を行っている。しかし、それは「僕」のみかたをなぞり返し、作者の意図にそってこの詩を読ませる方法を示したにすぎない。

(6) 「中学校国語 教師用指導書 2下」(昭和五十七年二月、光村図書出版株式会社、一三頁)。同書もまた右の西郷氏と同様の「作品分析」に終始している。

(7) その例として以下に列挙する。北林正、前掲論文。安藤操「文学教育——その実り豊かな実践のために——」(一九七八年八月、新評論、三四―四八頁)。古神子民夫「生徒をひきつける発問——『夕焼け』(教出一年)——」(一九八四年五月、『国語教育』、明治図書、六三―六八頁)。また、学生の教育実習での研究授業とその批評会においても同様であった。